



黛まどか（まゆずみ・まどか）

1962年、神奈川県生まれ。俳人。94年、「B面の夏」50句で第40回角川俳句賞奨励賞受賞。99年、北スペイン・サンティアゴ巡礼道約900キロを徒歩で踏破したのに続き、2001年～02年、四季にわたり5回訪韓し、釜山からソウルまでの道のり約500キロを徒歩で踏破。02年、『京都の恋』にて第2回山本健吉文学賞受賞。05年より「日本再発見塾」呼びかけ人代表。主な著書に、句集『B面の夏』（角川書店）、『京都の恋』（PHP研究所）、紀行集『ら・ら・ら「奥の細道」』『星の旅人』（以上、光文社）、対談集『17音の交響曲』（東京書籍）他多数。近刊に『あなたへの一句』（バジリコ）、『俳句脳』（角川書店）。携帯メルマガ「週刊まどか歳時記」を毎週日曜朝10時に無料配信中。

黛まどか公式ホームページ <http://madoka575.co.jp>



上＝田耕農林漁家婦人活動促進センター前にある「一字庵菊舎碑」。
下＝妙久寺で「菊舎顕彰会」会長の岡昌子さん（左）と歓談する黛さん。

女流俳人の先達、 田上菊舎に魅かれて

山口宇部空港からの高速道路上で左右を見渡すと、山は鷹揚に笑っていましたが道の駅「蛸街道西ノ市」へ直行して、バイキングのお昼。湯河原の自宅を出たのが早く、朝食をきちんとしていなかったので、朝食をきちんとしていなかったので、地産地消のゆたかなお惣菜がおいしく、五感が目覚めていくのがわかります。

これから向かう田耕^{たすき}は、江戸期の女流俳人田上菊舎尼（一七五三～一八二六）のふるさとです。十六歳で田耕村中河内の村田利之助に嫁ぎましたが、二十四歳で死別し、長府に移住していた実家に復籍しました。その後、二十九歳で浄土真宗の女僧となり、俳諧の旅に出たのです。あの時代に一人旅でした。

私も旅の多い暮らしをしています。かつて徒歩でスペインのサンティアゴ巡礼道を約九百キロ、韓国の釜山からソウルまでを約五百キロ歩いたことがあります。不思議なのはサンティアゴの道を歩いているときでも、私の頭によぎったのは松尾芭蕉（一六四四～九四）の『奥の細道』の旅でした。足にまめをつくり、荷物を肩に食い込ませながら、歩き続ける旅の中、ピレネーの峠をやつとの思いで越えたときに、道ばたに咲いていたすみれ草。芭蕉に「山路きて何やらゆかしすみれ草」という句がありますが、その意味を初めて本当に理解できた気がしたものです。三百年前の日本の俳人と、異国スペインで、思いが繋がった。それは時間も空間も違っていても、互いに俳句とい



五感の天使・黛まどか

俳句と文Ⅱ黛まどか
撮影Ⅱ橘野栄二

下関で17音の宇宙の旅

旅する佳人、恋する俳人の黛まどかさんが、下関を歩いた。

伝統を踏まえつつ独自の感覚で詠む十七音は、つねに斬新。

その先の俳句へ、という祈りにも似た俳句的人生が凝縮されている。

旅する女流俳人の草分けのような田上菊舎（下関出身）の足跡にふれ、

絶景の海浜温泉で憩って生まれた、旅と出会いといで湯の名句五句。

余白のそのまた余白まで、たっぷり鑑賞してください。